

令和 6 年 5 月 16 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02553

研究課題名（和文）移民の親の教育関与を支える〈家族－学校－地域連携モデル〉に関する日米研究

研究課題名（英文）Increasing Immigrant's Parental Involvement through Family, School, and Community Collaboration: US-Japan Comparative Study

研究代表者

額賀 美紗子（Nukaga, Misako）

東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授

研究者番号：60586361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では日米の学校やNPOにおけるフィールドワークを実施し、移民家族が受け入れ社会で直面する複合的困難を具体的に示すことによって、移民の親の教育関与を阻む経済的・文化的・社会的メカニズムを明らかにした。特に排外主義と支配的な家族規範が移民家族による教育資源へのアクセスを妨げるプロセスを解明し、その傾向がコロナ禍によって強化されていることを指摘した。日米比較の視点からは、移民家族の子育てニーズが日本においては一層不可視化され、家族の自助努力が求められる中で行政やNPOによる支援基盤も脆弱であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、受け入れ社会の中で不可視化される移民の子育てニーズを参与観察や聞き取りから詳細に掘り起こし、受け入れ社会の支配的な文化と構造が移民家庭の子育て困難を生み出すプロセスを明らかにしたことである。特にコロナ禍以降は日米両国において移民の子どもたちの教育機会とウェルビーイングが損なわれていることを示し、教育と福祉の両側面から公教育の役割を再定義し必要な施策を整備していくこと、親子二世代に対する社会的包摂策を検討すること、家族を中心に据えた行政・学校・NPOの持続的な連携と支援体制を構築することの重要性を提起した。

研究成果の概要（英文）：This study conducted fieldwork in schools and non-profit organizations (NPOs) in Japan and the United States, concretely demonstrating the complex challenges faced by immigrant families in their host societies. It revealed the economic, cultural, and social mechanisms that hinder the educational engagement of immigrant parents. Specifically, it pointed out that market-driven educational reforms, xenophobia and discriminatory structures intensified by the COVID-19 pandemic, and dominant family norms obstruct access to educational resources for immigrant families. From a US-Japan comparative perspective, the study showed that the childcare needs of immigrant families are more invisible in Japan, where families are expected to make self-help efforts while the support infrastructure provided by government and NPOs is fragile.

研究分野：教育社会学

キーワード：移民家族 教育関与 日米比較 教育保障 ケア ウェルビーイング 排外主義 コロナ禍

## 1. 研究開始当初の背景

現在グローバル化の進展下で多くの先進国は移民の子どもに対する公正な教育機会の保障という課題を抱えており、近年急速に移民に門戸を開きつつある日本社会もまた例外ではない。日本政府が単純労働を可能にする在留資格新設を発表し、事実上の移民受け入れ拡大に舵を切ったことにより、今後の日本社会では移民的背景をもつ子どもが一層増え、かれらの学習権や学力の保障に焦点をあてた「多文化共生」政策や実践の必要性がますます高まることが予測される。

移民の子どもの学業不振は先進国に共通して見られる現象であるが、その要因の1つとして、親の教育関与(parental involvement)の低さが指摘されている。移民の親はホスト社会の言語や文化的知識の不足、長時間労働などにより子どもの教育に十分関与できないことが指摘されている。このため、アメリカでは家庭、学校、地域が連携することによって移民や黒人、貧困層の親の教育関与を支える政策や実践の展開がみられる。しかし、こうした政策や実践は白人中産階級文化の共有を前提にすることが多く、移民の背景や文化を理解することなく、主流文化が想定する「教育関与」への適応を一方的に移民家族に押し付けていると批判もされている。

日本でも移民の親の教育関与を高めることの重要性は政策的な論議になっており、文部科学省有識者会議では外国人保護者と学校とのコミュニケーション促進が提案されている。しかし、アメリカの事例を参照すると、そうした政策や実践が同化主義に陥り、移民親子のエンパワメントにつながらない可能性が危惧される。必要なのは移民家族の視点にたつて教育関与の内実を探るところからはじめ、その関与を支えるためにホスト社会の学校や地域が連携してなすべきことや、主流文化が自明視する親の「教育関与」や家庭の責任のありかたそのものを問うことである。

## 2. 研究の目的

本研究は、移民の親の子育てと教育関与の多様な実態とメカニズムを解明し、アメリカのモデルケースに示唆を得ながら、学校と地域のネットワークにおいて移民家族の子育て支援と教育関与を促す文化的・構造的条件を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下のリサーチクエスチョンを扱う。

(1) 移民の親たちは受け入れ社会でどのような子育て意識や教育観をもち、子どもを育てるにあたってどのような困難に直面しているのか。子どもは親とのかかわりをどのようにまなざし、関係を築いているのか。比較対象群として、日本人家族の子育て実態についても明らかにし、日本社会における子育ての困難についても明らかにする。

(2) 受け入れ社会の学校は、移民の親子に対してどのようなまなざしを向け、その困難に対してどのような対応をしているのか(していないのか)。

(3) 教員以外の専門人材や学校外の市民団体は親子の社会的包摂に際し、どのような役割を担っているか。

## 3. 研究の方法

### (1) 国内調査

移民の数が少ない自治体におけるフィールドワークを実施し、特に市民団体が運営する「外国人の母親のための育児サロン」に定期的に参加した。この機会を通じて移民の母親や日本人ボランティアとのラポールを築き、家庭での参与観察やインタビューを実施した。また、移民の親子と関わる自治体の外国人児童向け学習支援室と保健所の担当職員にもインタビューを行った。

フィリピン系とブラジル系移民二世世代の若者36名に対して半構造化インタビューを実施した。質問項目は多岐に渡ったが、親への認識や親の教育的かかわり、幼少期から現在までの親子関係の変化について回顧的に回答してもらった。

関西・関東地域の学校で通訳・母語指導を務める移民女性8名にアクセスしてインタビューを行った。特に、通訳や母語指導に従事する動機づけ、業務内容、それらの役割を務めるにあたって学校で直面する困難について尋ねた。

### (2) アメリカ調査

サンフランシスコ学区において学校フィールド調査を実施した。2回の渡米調査を通じて、生徒の出身階層や人種構成の面で異なる公立学校10校を訪問し、授業の参与観察および管理職と教師合わせて21名に対してインタビューを実施した。そのうち7校はバイリンガル教育プログラム(英語のほか日本語、スペイン語、中国語)を導入している学校であり、プログラムの強みや運営上の困難に注目したインタビューを行った。また、1校は移民のニューカマー移民のために設置された高校であり、英語習得やキャリア支援プログラムに関してインタビューを行った。このほか、教育委員会のバイリンガルプログラム担当者とコミュニティリエゾン統括者にもインタビューを2回にわたって実施した。

#### 4. 研究成果

(1) サンフランシスコ学区でのフィールドワークをもとに、市場型教育改革と排外主義が、多様性をめぐるポリティクスを展開過程およびそれが教育的平等や社会的公正に与える影響を明らかにした。多様性のポリティクスが顕在化するバイリンガル教育に注目して考察した結果、サンフランシスコという移民の聖域都市においては、マイノリティの「権利」を重視する対抗言説が確立され、バイリンガル教育が定着している一方、近年のバイリンガル教育はマイノリティの「権利」としてよりも、国や自治体の経済発展や、グローバル経済における生徒の卓越化のための「資源」として重視される傾向が顕著にみられることがわかった。学校選択制の中でバイリンガル教育の獲得競争が促進されることは、ミドルクラスの覇権を拡大させ、人種的・階層的マイノリティの排除と教育的不平等を呼び込むことになっていた。排外主義・新保守主義に対抗する戦略として「資源」視点から多様性を称揚することの問題性を指摘し、「権利」の視点から多文化・多言語教育を構築していくことの必要性を提言した。

(2) 移民散在地域では、国際交流協会や市民団体が「資源仲介組織」として、孤立化傾向にある外国人の母親たちを必要な制度やサービスに繋ぎ、彼女たちの子育て資源の拡充とエンパワメントに不可欠な役割を果たすことを明らかにした。組織間連携が制度化されていない自治体では、人々の「個」の活動によって連携が維持・促進されており、「資源仲介組織」の機能を支えていることを示した。特に散在地域では移民の親たちが孤立した状態で子育てを行っていることの困難が大きく、資源仲介組織が移民家族の《見えない》ニーズを掘り起こす役割を担う意義は大きい。しかし、国や自治体による予算配分や連携のためのリーダーシップが不足するため、資源仲介組織は脆弱な制度的基盤の上に立っており、支援の持続性が常に危機に晒されていることの問題を提起した。

(3) フィリピン系を中心とする在日移民家族へのインタビュー調査をもとに、移民家族が日本社会で直面する複合的困難について分析を進め、移民の子どもの学習困難を理解するための理論的枠組みをデータから析出した。「教育する家族」の自助努力を前提とするマジョリティの価値規範と外国人に対する差別構造の中で移民家族が経験する、経済的・文化的・社会関係的資源の不足を指摘し、移民の子どもだけではなく、親も含めた二世代の社会的包摂が必要であることを提起した。

(4) フィリピン系移民二世代の若者に対するインタビュー調査をもとに、家族の日本社会への編入様式と親子関係に注目しながら、移民二世代のアイデンティティ形成と適応の多様性について明らかにした。その分析を通じて、公正な教育機会と多様性の承認について日本社会の課題を考察した。さらに、コロナ禍を経て移民の子どもが担う家庭内ケア役割が増えていること、これまで維持してきたトランスナショナルな関係性が弱まっていることを明らかにし、コロナ禍が移民二世代の若者の家族関係とウェルビーイングに与えた影響を示した。

(5) コロナ禍がマイノリティの親と子どもに与えた影響について、アメリカとイギリスのニュースサイト記事や報告書をもとに比較分析した。アメリカでは社会経済的に不利な立場にいる中南米出身の非正規移民の子どもたち、イギリスではパキスタン・バングラデシュ系の子どもたちに特にしわ寄せが行き、社会的排除が深刻化した。両国ではコロナ禍を機に、公教育の後退とペアレントクラシの進行、そして排外主義と制度的人種差別の高まりが顕著にみられる。一方で、コロナ禍は公教育の意義を再評価し、社会的公正の実現のために既存のシステムの問題点を見つめなおす契機にもなっており、特に学校が子どもたちの生存保障のために必要な場所になったことから、教育と福祉の両側面から公教育の役割を再定義していく必要性について考察した。

(6) 日本の公立高校教員に対するアンケートとインタビューデータをもとに、教員が外国人保護者とのコミュニケーションにおいて経験する困難を考察した。通訳制度が整っていないケースが多く、文化的・言語的障壁による意思疎通が難しい状況が明らかになった。自治体による通訳制度をユーザー目線で整備するとともに、ソーシャルワーカー、地域のNPO、移民の当事者と協働して移民の親が学校につながり、子どもの教育に関われる体制を作ることの重要性を論じた。

(7) 日本人の母親の子育て意識と実践について、就業中の母親55名に対するインタビューデータをもとに階層とジェンダー規範の影響に注目して分析した。日本では「教育する家族」と「子ども中心主義」の規範が強く、階層に関わらず全ての母親が子育てを優先させ、仕事をセーブするという行動をとっていた。一方、子育て・教育と就業の板挟み状況に対する対処戦略は階層によって自由度が異なり、高卒で非正規労働に従事する母親たちが最も葛藤を強く経験していることが明らかになった。日本では文化的・制度的に依然として子どものケアや教育の負担が女性に著しく偏っており、このことは移民の親が日本で経験する子育て困難の大きな要因となっていることを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 額賀美紗子	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 書評 野入直美『沖縄のアメラジアン—移動と「ダブル」の社会学的研究』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 92-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 額賀美紗子	4. 巻 -
2. 論文標題 トランスナショナルな教育、コスモポリタニズム	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 異文化間教育事典	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 額賀美紗子・高橋史子	4. 巻 54
2. 論文標題 コロナ危機と教育格差の拡大 米英の状況からみるマイノリティの教育機会と公教育の役割再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 異文化	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 額賀美紗子	4. 巻 106
2. 論文標題 アメリカの市場型教育改革と多様性をめぐるポリティクス：バイリンガル教育の展開にみるマイノリティ言語の価値闘争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 121-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 額賀美紗子	4. 巻 49
2. 論文標題 外国人家族の《見えない》子育てニーズと資源仲介組織の役割：外国人散在地域におけるフィールド調査からの政策提言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 異文化間教育	6. 最初と最後の頁 44-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 額賀美紗子	4. 巻 8
2. 論文標題 フィリピン系移民二世代の階層分化とエスニシティの日常実践 エスニシティは上昇移動の資源か、障壁か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 移民・ディアスポラ研究 人口問題と移民	6. 最初と最後の頁 245 - 264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Nukaga, Misako
2. 発表標題 Embracing Cultural Diversity in Japanese Education: How to Ensure Social Justice for Children of Immigrants
3. 学会等名 Stockholm U. & U. of Tokyo Joint International Seminar (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nukaga, Misako
2. 発表標題 Children of Immigrants in Japan: Understanding Challenges and Barriers to Integration
3. 学会等名 UK-Japan Student Conference (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nukaga, Misako
2. 発表標題 Book Talk: “The Second Generation Immigrants in Japan: Cross-Ethnic Comparison of ‘Newcomer’ Children Today”
3. 学会等名 UTokyo Center for Contemporary Japanese Studies Book Talk Series (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平・劉麗鳳・薮田直子
2. 発表標題 移民二世代の追跡調査 - コロナ禍における仕事・家族・差別
3. 学会等名 日本教育社会学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nukaga, Misako and Fumiko Takahashi
2. 発表標題 Integration of Immigrants and the Role of Public Education: Envisioning Inclusive Policies and Practices in the With/Post Covid-19 Era
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nukaga, Misako
2. 発表標題 Visibilizing the Second Generation Immigrants in Japan: Divergent Pathways of Acculturation and Educational Inequality
3. 学会等名 The SPICE Stanford CASEER UTokyo Lecture Series
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nukaga, Misako
2. 発表標題 How are Immigrant Parents Involved in Children's Education? The Paradox of Educational Attitudes and Behaviors among Filipino Parents in Japan
3. 学会等名 World Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tokunaga, Tomoko and Misako Nukaga
2. 発表標題 Diverging Academic Trajectories of Immigrant Students in Japan: The Possibilities of In-and-Out of School Policies and Practices
3. 学会等名 Comparative and International Education Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 額賀美紗子、藤田 結子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 働く母親と階層化	

1. 著者名 恒吉僚子、額賀美紗子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 256
3. 書名 新グローバル時代に挑む日本の教育 - 多文化社会を考える比較教育学の視座	

1. 著者名 清水睦美、児島明、角替弘規、額賀美紗子、三浦綾希子、坪田光平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 704
3. 書名 日本社会の移民第二世代 - エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今	

1. 著者名 額賀美紗子、芝野淳一、三浦綾希子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 移民から教育を考える - 子どもたちをとりまくグローバル時代の課題	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------